



(財) 第五福竜丸平和協会
〒136 東京都江東区夢の島3-2
都立・第五福竜丸展示館内
電話 (521) 8494

アジア・太平洋における
イニシアティブへの期待
米ソ中距離核戦力(INF)廃棄条約の締結は、ヨーロッパにおいて冷戦のブロック対立を解消させる方向への序曲であった。その交渉妥結に必要な国際環境を整備していたのは、実は、「ポーランドからポルトガルまで」ヨーロッパの非核化を要求した平和運動であり、それが作りだした反核世論であった。世論の動きは、パルメ委員会や核戦争防止国際医師会議など、効果的なイニシアティブを生み出した。

アジア・太平洋における
立花誠逸
も受け入れる場合には、それを自己の立場に有利に取り込もうとすること、それでも政治的決断がありさえすれば核軍縮は実現できることを示した。しかし、米ソとも、けっして、核兵器依存の哲学から核兵器廃絶のそれに改宗してはいない。核実験全面禁止は交渉対象にもされていない。戦略兵器削減条約(S.T.A.R.T)交渉は難航している。とはいえ、条約が調印されるならば、その不十分性と条約後の課題に注意が向けられるという意味では、新局面の展開につながるであろう。

の第三世界諸国との共栄のあり方をも提示できるかどうかであろう。
アジア・太平洋地域では、アメリカの前方配備基地と海洋核戦力の展開、分断国家、地域紛争、開発格差、環境破壊など、東西・南北問題が錯綜している。そのなかで、緊張を和らげる方向へ局面転換をはかるには、関係諸国による動きが必要である。中ソによる戦力の一部削減、ゴルバチョフの諸提案、アメリカによる戦略見直しの動きは、日本政府は現状維持を決め込んでおり、まだ決定打は無い。
アジア・太平洋は、確かに、ヨーロッパとは条件を異にする。しかし、現状打開の糸口は、迂遠なようでも、この地域における国際関係の民主的な基礎を築くかたちで追求されるべきであろう。
市民・NGO運動、科学者、オピニオンリーダーなどによる国際的連携のネットワークを發展させることが、さまざまなイニシアティブを生みだし、関係諸国政府の動きを誘うことにつながるのではなからうか。日本の関係者によるそのような努力に期待したい。
アジアは平和五原則、バンドン精神、非同盟の理念などの発祥地でもある。(山梨県立女子短期大学教授)

船を見つめた瞳から
春風と卒業記念作品

展示館前の小さな花壇の水仙がひらきチューリップのつぼみがふくらんだ三月、展示館は五十余の学校・団体、二万名近い来館者にとぎやかでした。学童クラブの見学会も多数あり、紙しばい「とびうおのぼうや」をお母さんに読んでもらったり、画用紙をひろげたり姿がめだちました。テレビ局、新聞社の取材もあり、三月十四日には、福竜丸焼津帰港の日の「実況中継」で静岡第一テレビが焼津、展示館から放送。中国新聞の取材で大石又七さんも展示館でインタビューを受けました。

が舞い込みました。昨年五月、修学旅行で来館した白浜町の富田中学校で、卒業にあたって作ったという記念の作品がいっぱいでした。布ぎれを張り合わせ第五福竜丸を描き、周りに刺しゅうをした直径一メートルほどのワッペンのような壁掛けと一人ひとりの自画像、作文集とその表紙のイラストなど。壁掛けの刺しゅうには「正義をやどせ」と日英両文でかかれていました。自画像は「自分を見つめ、平和を守り築く決意を新たにす」と四カ月かけてていねいにかいた水彩画で、みんな表情豊かなもの。先生の手紙には「卒業していった生徒の強い希望でしたので送ります」とありました。展示館見学後、平和学習を継続し、卒業式に自分たちで作った平和宣言文を読みあげて巣立っていったそうです。



英語版出版
『とびうおのぼうやはびょうきです』『わすれないで』(金の星社発行)は、好評ですが、こんどその英語版が同社より発行されました。とびうおのぼうやが、世界の海をとびまわってほしいものです。マーシャル語では、ジョージョー、ということか。

第五福竜丸の保存工事
の報告書が完成

一九八六年三月完了した船体修理の報告書『第五福竜丸保存工事報告書』(A4判二百頁)が、このほど工事を監督した文化財建造物保存技術協会により編集発行されました。船の歴史・概要・船体調査・保存工事の内容・造船木工技術の五章よりなり、関係年表・工法調査表などが資料に付けられています。二年間、困難をきわめた修理工事の全容が、専門的技術的面から詳細に記述されていて、百点近い挿図・図表・図面は一級の資料。巻末には工事の進行写真が各部にわたって三百三十数葉付けられ貴重な報告書となっています。歴史に残る工事内容を知ると共に、木造船の構造・技術を理解する上で重要です。非売品ですが必要な方には送料共一萬円で頒布します(平和協会まで)。

「深川造船」

三月末で閉鎖

夢の島はじめ東京湾のウォータフロントの開発は目を見張るばかりですが、「未来」と引きかえ

に失うものはないのでしょうか。
第五福竜丸の修理に力を尽くしてくれた江東区潮見の「深川造船」がこの三月、工場を閉鎖しました。「先代より数えて六十余年。造船業に邁進して居りましたが、最近当該地域の開発が急速に進み、とても造船業を続けていける環境では無くなって参りました。」協会によせられた挨拶にかかれていました。

新年度事業計画、予算を決定―協会理事会開く

三月二十六日、協会の第九三回理事会が学士会館で開かれ①会務報告②一九九〇年度事業計画③同予算を審議決定しました。事業計画ではとくに展示館の修理と拡充、見学校の増加を重点課題とし、展示内容の充実にさらに力を尽くすことになりました。六月十一日(月)に日比谷公園松本楼で協会設立記念集会及び評議員会を開くことも決めました。

東京都と契約更改

四月一日、東京都と新年度の「展示館に係る業務委託契約」の更改が行なわれました。

平和随想 ③

三宅 泰雄



「むつ」と言っても、今の若い人たちで、よく知っている人は少ないようです。もちろん「むつ」が東北地方の市名であることは、誰でも知っています。それが、原子力船の名前でもあることを、覚えていない人が少ないという意味です。

わが国でも、原子力で動く船を作ろうと考えたのは、一九六〇年頃からのことで、日本原子力船開発事業団ができたのが、一九六三年でした。実際に船をつくりはじめたのは、一九六七年のこと、その二年後に船体ができあがり、つ市にある大湊港にまわされ、そこで原子力エンジンや核燃料をつみこみ、一九七二年に一応、完成

と見なされました。普通は、船体とエンジンは同じ業者でつくるものですが、この船の場合は、船体とエンジンはそれぞれ、別の会社が担当しました。

この船が出力上昇試験のため、大湊を出港したのは一九七四年の夏のことでしたが、放射線漏れの事故を起こし、十月になって、やっと、ふたたび大湊に戻る事ができました。漁民との折衝に手間取ったためでした。せっかく造った船を故障のため、そのあと、どうするかが大い問題となり、廃船にするか、もう一度、徹底的に検討して修理するかで、議論が沸騰しました。私もその渦中にまき込まれ、原子力船開発事業団理事の倉本昌昭君とともに新聞社に呼ばれ、対談をさせられました。倉本君は存続論の立場から、私は廃止論からということでした。しかし、政府の方でも、一度は廃止と認め、軍事的な重要性から、存続論がしだいに優勢となりました。開発事業団の仕事も、原子力研究所に移し替え、徹底的に修理をする事になりました。そこで、船を佐世保の造船所に移し、そこで修理作

業を進めることになりました。佐世保でも、船の修理は二年以上もかかり、いったん、また大湊に戻りました。一方、政府は下北半島の北側にある関根浜に、この船のためだけの母港を作ることを決めました。一九八八年になって、ようやく新母港が完成したため、「むつ」は、その真冬の吹雪の中をついて、新母港に移ることとなりました。

前にも述べたように、放射線漏れを起こし、大問題となったのは一九七四年のことでしたが、それ以来、今日までに、すでに十六年という長い歳月がたつてしまいました。その「むつ」も、今年の内、やっと、最後の仕事にとりかかる準備をしているようです。はじめはまず、岸壁と、その近くの洋上で、徐々にその出力を増しながら、原子炉の遮閉効果をたしかめるようです。この試験が通れば、船はこの秋から、約一年間くらいの子定で、十六年ぶりに外洋に出て、原子力船として必要な、いろいろな試験を徹底的に行なうことになっていきます。この洋上試験が終了したあとの、船の処置については、多分、廃船となるでしょう。

原子力船には普通の船のように、多量の燃料は不要ですし、燃焼用の空気も不要です。これらは、特に従来の潜水艦にくらべて、大きい利点をもっているのが特徴です。すでにアメリカでは、これらの利点に着目し、早くも一九五四年にはじめて、原子力潜水艦のノーチラス号を発足させました。ソ連でも数年おくれて、原潜を開発しました。その後は、米・ソとも原子力艦は、海軍の主要な戦力となりつつあり、大型の航空母艦等も、年毎に増えつつあります。おそらく、我が国も、それを見習うつもりではないのでしょうか。

平和利用の原子力船の数はまだごく少ないものです。アメリカのサブナ号(一九五九年進水)、ソ連のレーニン号(一九五七年進水)、アルクチカ号(一九七二年進水)、西独のオットー・ハーン号(一九六四年進水)などのことが報せられています。しかし、この中には、すでに廃船となったものもあります。



「安全」でなかった「安全宣言」

後藤 幸信

らしていました。

一九七二年十一月十五日、アメリカ・メリーランド州にある全米保健研究所病院で、一人のミクロネシア人少年が短かい生涯を閉じました。少年の名前は、マッシュアル諸島ロンゲラップ島出身のレコジ・アンジャイン。十九歳でした。レコジ君は一歳の時、久保山さんたちと同じように、ビキニ環礁での水爆実験による、「死の灰」を浴びました。以来甲状腺の異常を訴え、高校を卒業した年の定期検査で白血球が極端に減少していたために、アメリカでの入院生活を送っていたのです。レコジ君の父親は、レコジ君が亡くなる三か月前日本を訪れ、ロンゲラップ島の被ばくの実態を私たち日本人に伝えたいばかりでした。

ロンゲラップ島は、ビキニの核実験場から百九〇キロ離れた小さな、小さな島です。被ばく当時は八十二人の人びとが、貧しいながらも豊かな自然の中で、平和に暮

とところが悪夢のようなあの日、人びとは事前の説明も、ましてや避難の通報もないままに、全身に「死の灰」を浴びたのです。それはレコジ君たちの頭の上に、まるで塩の粒のような小さな固まりとなって、パラ、パラと降ってきました。あたりは夕暮れ時のように薄暗くなり、強い風が家々の屋根や戸板を、ガタ、ガタ、と揺らせました。被ばくの後遺症は、いまも続いています。

実験場に当てられたビキニ環礁は、さらに悲惨です。アメリカ政府が一九六八年「安全宣言」を出した島の土壌には、大量の核分裂生成物セシウム137が残留していたのです。一千キロ南のキリー島に疎開し、ようやく島に戻った人びとは、再びキリー島での不自由な避難生活を送っています。その結果、キリー島の人口は超過密状態となり、生活環境が悪化して

います。

アメリカ政府は、ハワイ州のマウイ島や、北マリアナ連邦のテナアン島への再移住計画を検討していますが、受け入れ側は難色を示しています。島の人びとは、なんとか生まれ故郷に戻れるように、土壌中に残留している核分裂生成物を除去して欲しいと、アメリカ連邦地方裁判所に集団訴訟をおこしています。

俗に「死の灰」と呼ばれている核分裂生成物の半減期(放射能が最初の半分になるまでの時間)は、まぢまちです。百万分の一秒という短い時間で半減するものもあるが、四十五億年という気が遠くなるような長期に及ぶものもあります。

島の人びとの訴訟に対して、アメリカ政府は専門家グループに調査を委託しました。その結果を待って、具体的な土壌浄化策を打ち出すことにしていますが、費用は一億三千万ドルとも二億ドルとも言われています。それだけの費用をかけても、核分裂生成物を除去できるのかどうか。その保障はまったくありません。核兵器という殺人の道具が、軍

事大国の一方的な都合によって、つぎつぎに開発、実験されてきました。その結果、ただでさえ汚染と破壊が続くこの地球上に、新たな汚染物質を、それも大量に生み出しています。何の罪もない人びとの生命や財産を奪い、脅かしています。

ビキニの人びとは訴えています。「われわれは、核兵器が生む危険を恐れるだけではない。自分たちの土地から、別の土地へ移されることについても、強い不安を感じている。われわれにとって土地は、木を植え、家を建て、死者を葬る場所だけではない。土地を奪い取られることは、心を奪い取られることと同じことである。」

地球上から核兵器を無くすことに、イデオロギーも躊躇も不要です。(ジャーナリスト・仙台市在住)

